

「誰が隣人に「なった」か」
(ルカによる福音書 19:25-37)

「神を愛し、隣人を愛する」という律法の核心を、律法学者は知っていました。主イエスからも「正しい答えだ」と言われます。しかし、「それを実行しなさい」と言われた律法学者は、「隣人とは誰ですか？」と主イエスに問い直します。彼の発想は、実行する前に隣人を特定し、隣人の範囲をまず確定した上で、その範囲内の人だけを愛そう、というものです。

ユダヤ人である彼の愛の対象、隣人には、当然サマリア人は入っていません。なぜなら、ユダヤ人とサマリア人は歴史的に強く対立し合ってきたからです。そして彼にとって隣人とは、レビ人や祭司といった正統なユダヤ人であり、「身内」でした。しかし主イエスのたどる道は、まったく異なる隣人を知らせます。瀕死の人を横目に通り過ぎた祭司とレビ人に対し、サマリア人はその人を助けます。そして主イエスは問います。「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法学者は嫌悪する「サマリア人」という言葉すら発したくないのでしょうか、「その人を助けた人です」と答えます。

誰が隣人で「ある」かと問うた律法学者に対し、誰が隣人に「なった」かと問うた主イエス。ここに鮮やかに違いが表されています。祭司やレビ人は、瀕死の人が目の前にいても、その人を思うよりも、その危険な場所から身を避けることを考えました。しかしサマリア人は瀕死の人を憐れみ、近寄って介抱し、この人に尽くしました。

憐れみとは、相手の痛みや悲しみへの、腹わたがちぎれるほどの思いです。それは、虐げられた人や病にある人を見つめる主イエスの思いであり、放蕩息子が帰ってきた時に駆け寄って迎えた父親の思いです。そしてそれは、神のわたしたち一人ひとりへの思いです。神がそれほど大切にしてくださっている「命」そのものを心底大事にするとき、目の前の人を隣人になるのです。それは決して人種や立場、そういう違いによって限定されるものではないのです。

主イエスは言います。「行って、あなたがたも同じようにしなさい。」わたしたちが誰かの隣人になることを妨げるものは何でしょうか。ただひたすら単純に、目の前の命を見つめ、駆け寄る人間でありたいと願います。